

# 終 章

## 1. 自己点検で明らかになった長所・問題点に対する本学の総合的評価

本学は、和歌山県内唯一の医療系大学であり、県内の地域保健、医療活動を展開する上で極めて重要な位置を占めている。つまり、医師をはじめとする地域の保健医療に従事する人材を供給し、また、先端的な医学研究、臨床、それに基づく保健医療に関する最新の知識・技術の普及、啓発やサービスの提供により、県内の保健医療の水準を維持発展させていくことが期待されている。

また、広範な地域を有する本県の場合、本格的高齢社会の到来や過疎化の進展等により、農山村等の住民にたいする保健医療サービスの充実が課題の一つと考えられるが、このような課題を解決していく上で、本学の果たす役割はますます増大していると考えられる。

公立大学である本学は県民の負担によってその財源の一部が調達されているが、以上のような役割が期待されている中で、本学がその責任を十分に果たしているのかどうか絶えずチェックすることが必要であろう。本学に関する情報は地域住民に対して積極的に公開、提供される必要があり、このことによって県民に対する説明責任を果たしていくことは当然であると言える。

これらの本学の使命を達成していくプロセスとして、本学における自己点検・評価は重要であり、本章では、各項目別の自己点検・評価をふまえて、明らかになった問題点に対する総合的評価として以下にまとめることとした。

### (1) 教育

医学部医学科は6年一貫教育を基本方針としており、中でも人間性豊かな教育に力を入れると同時に、単科医科大学の特徴を生かして、きめ細やかな教育が展開されている。特に、倫理、人権教育に関しては、部落差別問題を基本的学習テーマとして、入学時から全学年にわたって、さらには、全学構成員に対する継続的教育プログラムの基に積極的に展開されている。医学的側面だけでなく全人的な倫理観、人権意識を涵養する上で評価される。先覚的な教育カリキュラムとして、基礎系講義終了の時点で基礎配属が行われている。これは、3年次の学年末の8週間全日にわたって学生の希望の基礎系各教室に少人数が配属されて、主体的に研究テーマに取り組むものである。他学の導入に先がけて昭和46年度から導入され、学生にとっても魅力のカリキュラムの一つとして定着している。今日重要視されている参加型基礎医学系カリキュラムの一環として評価されよう。

教育目標は講座、各系ごとに設定され、具体的到達目標のもと講義実習等が組まれている。また、臨床実習を重視したカリキュラム編成に改良されて評価できるが従来の講義中心から参加型を重視したチュートリアルの導入や臨床能力の評価法としてOSCEの導入や教員側の教育技能、評価技能の向上させる

ための積極的なFDの展開等もみられるものの、なお改善が計られるべきである。

大学院では医学研究科における教育、研究指導方法の改善により大学院カリキュラムの充実が計られた点は評価できる。

各教室、講座の枠組をこえたダイナミックな研究活動が行える大学院組織の再編・整備が急務であろう。

## (2) 学生の受け入れ

学部学生に対する入学者選抜制度としては、推薦入試、一般入試として、前期試験、後期試験がある。将来医師、医学者として優れた人材を選抜することは最も重要であることから、学力のみならず豊かな人間性の視点から課外活動や仲間との協調性を調査書、自己推薦書、面接等で積極的にかつ総合的に評価する試みは評価されよう。しかし、豊かな人間性をどのように評価するのかが依然として重要かつ難しい問題で、今後共、多面的な検討が必要であろう。

大学院学生に関しては、平成15年度から、社会人入学制度をスタートさせ、社会に開かれた大学院の実現の一環として評価されよう。

大学院定員については、漸次充足率の改善がみられ、平成15年度入学生は100%に達している。大学院入学試験の年2回実施も定員確保には有効である。

## (3) 研究

本学は地域に貢献する医師の育成と同時に地域貢献を目指した医学研究と臨床をその中核とすべきである。その内容は地域貢献といえども世界レベルでなければならない。

研究活動業績については、「和歌山県立医科大学活動報告書」から評価される。各部門の努力により相当の研究実績は認められるが、COE(センター・オブ・エクセレンス)申請に対する外部評価からは、厳しい評価がなされている現況である。そのためには、大学院の充実、講座の枠をこえた活発な共同研究が行える環境づくりが急務である。若手研究者が大胆に登用される体制づくりも重要であろう。

研究費の大胆な投入が期待されるが、現実には県の財政状況の悪化から増額が期待できず、国や各種団体の研究費を積極的に確保する必要がある。

また、研究時間の確保も重要である。特に臨床系教員は、夜間、休日の研究を余儀なくされている。その対策として平成15年後から図書館の土曜日開館の実施はが始まる。研究支援体制の充実として評価されよう。

## (4) 施設・設備

平成10年9月紀三井寺新キャンパスへの統合移転は、平成11年5月の診療開始によって完了し、新しい施設・設備による大学の教育、研究、診療が行

われるようになった。最新で快適な設備が整備されている点が大きく評価できる。

ただし、教育に関しては、参加型教育を展開するための小教室等のスペース確保、学生の自主学習のためのスペースの確保等更に改善すべき問題も出てきている。

施設・設備の利用状況・管理運営から見た場合、電力使用量の削減等、エネルギーの効率的な消費も課題である。

#### (5) 図書館および図書館の資料

前項で述べたように、図書館設備も一新され充実した。それに伴って、図書館機能、サービスは利用者のニーズに応えるべく着実に充実されてきていることは評価される。しかし図書等の資料の充実については専門誌や蔵書の種類、冊数はいずれも専門図書館として未だ充分とはいえず一層の充実が求められる。

大学の社会貢献が強く求められる今日にあって単に医学書を整備して利用者へ供する従来の図書館機能を発展させ、医学、医療情報を学内外に発信するセンターとしての役割を充実させる必要がある。

#### (6) 学生生活への配慮

本学では「大学は学生の快適な生活の場」として、各種奨学金の貸与、授業料等の減免などの経済的支援、オリエンテーション、新入生合宿研修、学友会活動、課外活動支援、学生相談室の設置などの学生生活支援、保健管理室を設置し、内科及び神経精神科の専門医を配した学生の健康管理への支援を行っている。

多様化する学生の生活上の悩み、メンタルヘルスをはじめとする健康管理へのよりきめ細やかな支援が期待される。

#### (7) 管理運営

本学は、設置者が県であることから、大学における活動を自己点検・評価し、県民に対して本学の活動状況を積極的に公開し提供していく必要がある。平成16年4月から医学部に加え保健看護学部（仮称）が開設され2学部体制の医療系大学となるが、2学部をふまえた明確な大学の理念、目標のもと、より活発な活動が展開され、恒常的に点検・評価され、大学の活動状況が積極的に発信される体制の確立が必要である。

## 2. 総括をふまえた今後の方策

本学の使命は、確実な知識・技能をもち、人間性豊かな医師を育成すること、地域医療のニーズに根ざしたテーマを深く掘り下げ、直面する医学・医療に関する問題を解決するような研究を幅広く展開し、しかも、先端・先進医学に貢

献する研究を行うこと、地域の中核医療機関として、地域医療機関のリーダー的役割を果たすとともに、最新の医療を患者の立場、ニーズに沿って提供すること、さらに、最先端の医療、保健、福祉に関する情報をわかりやすく地域の人々に伝達し、健康の増進に寄与することなどである。

即ち、和歌山県たる地域に根ざした、教育、研究、診療、地域貢献が本学の使命である。従前より、本学は地域の医療、保健、福祉の発展、向上に寄与してきた。これらの目的をさらに発展させるため、大学自らが行った自己点検・評価の結果、教育、研究、設備、管理体制の現状と問題が明らかになった。引き続き自己点検・評価と今後に向けた方策を計画的に実施していくとともに、現在進行中である診療、地域貢献に関する自己点検・評価を速やかに完了させ、大学全体についての現状の認識をふまえ今後に向けた方策を実施していかねばならない。